

社会主義期の音を聞く

やぎ ふうき
八木 風輝

総合研究大学院大学博士課程
日本学術振興会特別研究員 DC2



ラジオ局で働いてみました

左から筆者、ラジオ局長、エセンケルディ氏 (2018年)

楽器の音はむかしも今も同じなのだろうか。そんな素朴な疑問を胸に、筆者はモンゴル国のラジオ局を訪れた。磁気テープから流れる音色の違いから、カザフの弦楽器におよんだ社会主義期の近代化政策が見えてきた。

ロシアや中央アジア、そしてモンゴル国で広く浸透していた社会主義体制が崩壊して、三〇年近く経つ。ソ連が崩壊する一九九一年に生まれ、わたしは、大学に入学するまで、社会主義というものをまったく理解していなかった。モンゴル国に滞在し、聞きとりと公文書の内容を参考に、モンゴル国の少数民族カザフ人の音楽史を調査するようになって、社会主義というものを少しずつ感じるようになった。

しかし、音楽の歴史を調査しているのに、人びとの語りや文献中心の調査をしていたため、わたしは社会主義期に演奏されたカザフ音楽を聞いたことがなかった。実際どのような音が社会主義期に鳴っていたのかを知りたくなったわたしは、モンゴル国バヤンウルギー県のラジオ局に向かった。そこに少数民族の音楽アーカイブズがあるというのである。

ラジオ局員(仮)になる

モンゴル国バヤンウルギー県という、首都のウランバートルから西に一七〇〇キロメートル(夜行バスで行くと約二日)のところには、少数民族であるカザフ人が九万人ほど住んでいる。県都ウルギーの中央広場前にある建物の二階に、ラジオ局があった。このラジオ局が、音楽アーカイブズ「アルタンコル(金庫の意味)」を所有しているようだった。



音楽アーカイブズ「アルタンコル」の室内 (2018年)

例えば、カザフの弦楽器にドムブラというものがある。しかし、この音楽アーカイブズに収録されている多数の曲からは、同じドムブラという楽器で演奏されているのに、曲ごとに「くぐもった音」と「はつきりとした音」の異なる音が聞こえてくるのである。

こうした楽器音の違いはなぜ生まれたのだろうか。理由は、社会主義がもたらした楽器の形と材質の変化に関係があると考えられる。もともと社会主義になる前のドムブラの弦は家畜の腸(ガット)で作られていた。遊牧を生業としてきたカザフ人のなかで、もっとも長い「糸状のモノ」といえば、腸であった。

それが、社会主義期を経るなかで、楽器の近代化が政策的におこなわれた。そのひとつに、ドムブラの弦をガット弦からナイロン弦へ、胴の形状もダイヤ型から卵型に変えるというものがあった。一九六〇年代以降に録られた曲には、同じ楽器の演奏でもふたつの異なる音が存在する状況があったのである。

社会主義期の終わりから約三〇年が経った現在では、すべてがナイロン弦のドムブラとなつてしまった。この楽器の例のように、社会主義体制が崩壊した現在、わたしが耳にしている音は、「社会主義期の音」とはまったく異なるといえる。この音楽アーカイブズは、今ではもう聞こえなくなった音を残す唯一の記録として、社会主義を知らない人びとに、その時代の音を伝え続けるのだろう。



民族楽器ドムブラ。右2つがダイヤ型。左3つが卵型 (2014年)



磁気テープの内容を記述するエセンケルディ氏 (2018年)



みにされ、それを読み込むためのテープレコーダーとコンピューターが設置されていた。

ここで、局長が一人の青年を呼び、わたしに紹介してくれた。彼の名をエセンケルディといい、アーカイブズにある磁気テープの中身をコンピューターでも聞くことができる音源に変換する作業を担当しているという。局長と彼は、一九六〇年末に設立された音楽アーカイブズの歴史を簡単に説明した後、その作業を手伝ってくれないかと、わたしに依頼してきた。

わたしは喜んで引き受けることにした。これ以降、ラジオ局の一員(仮)として、平日の毎日二〇時にラジオ局に行き、一七時まで磁気テープを回しながら、音楽を聞きつつ目録を作るといふ日々を過ごすことになった。

弦楽器にあらわれるふたつの音

この音楽アーカイブズには、社会主義期にモンゴル国バヤンウルギー県の全域でカザフ人が歌った約二五〇〇以上の曲が収録されている。それらの曲を聞くと、当時の音の実態を体感することができた。